向井潤吉アトリエ館

世田谷美術館分館

向井潤吉
春隣の風景 山野に佇む民家展

平成17年
12月4日(土)—3月27日(日)

向井潤吉の民家を描いた作品には、それぞれの季節特有のありさまが、克明に表されています。元来、旅好きという自身の性分もあり、向井は民家のある風景に、飽くなき探究心を抱き続けました。向井は、木々繁る奥深い山村に、あるいは古(いにし)えの記憶を刻む街道の魅力に呼び寄せられるように、地図を携え、小径(こみち)へ分け入っていきました。

キャンバスには、四季折々に輝く多様で豊かな表情が、繊細な筆致によって鮮やかに描かれています。晩冬深寒の京都大原の山野、すっぽりと雪におおわれた長野の峡谷の村、立春穏やかな埼玉川越、そしてようやく訪れる岩手の遅い春。そうして、いくつもの「春」の姿をじっくりと眺め楽しむかのように、向井は季節の移ろいの間(はざま)に生じる景色を、如実に捉えています。

向井は民家を主たるモチーフとしながらも、民家のみにこだわることなく、「その場」の景色全体を五感で受けとめ、風土そのものを素直に捉えて描きました。とりわけ春に取材した作品には、爽快で力強い自然の息吹が横溢(おういつ)し、向井が感じた気配—光、空気、匂い、風—、民家を取り巻くあらゆるものが互いに調和しながら混交し、観る者の心をその地へと誘います。

向井は、時代とともに失われていく民家のある風景を、単なる記録として描き留めたのではなく、「その場」に息づく人々の営みと、刻一刻と変化する自然の表情との出会いに魅了されて、自身の感性に従い、絵筆を走らせたのです。

人の暮しの土台となった民家と、自然との関係を通し、向井の好んだ晩冬から「遅れる春」へと向かう季節のゆるやかな移ろいを、ごゆっくりとお楽しみください。春を待ちながら…

1

2

3

4

1《宿雪の峡(長野県下水内郡栄村秋山郷)》1983年
2《春叢(埼玉県東松山市神戸)》1988年
3《不詳(風景)》制作年代不詳
4《半鐘のある村(静岡県)》制作年代不詳